川の本

1996 春の号

No.40

カッパの神さま

〔青森県西津軽郡木造町〕

むかし、木造新田あたりの川には、カッパがたくさんすんでおって、そのカッパに、毎年 何人かのわらし（こども）が、水のなかにひきずりこまれては、死んでおった。

このあたりは、どの家々のまわりにも 小川が流れていて、わらしがいる家では、しんぱいで おちおちしておれなかったそうじゃ。

ところで、村の弥市の家にも、かわいい男わらし（男の子）がひとりいた。

「うちのわらしほど、かわいいわらしは 見たことがない」

と、弥市とおかみさんは、それはそれは 目にいれてもいたくないほどかわいがっておった。

そのわらしが 五才になったときじゃ。

弥市夫婦は、しょうらい、わらしが どんなにえらくなるか、村いちばんの占い師に 運勢をみてもらうことにした。

弥市夫婦は、わくわくして、いい占いがでるのを待った。

ところが、占いにでたおつげは、とんでもないことじゃった。

「このわらしは、カッパがねらっている。近いうちに カッパがさらいにやってくるであろう」

これには、弥市もおかみさんも、びっくりどってん 腰をぬかすほどおどろいた。

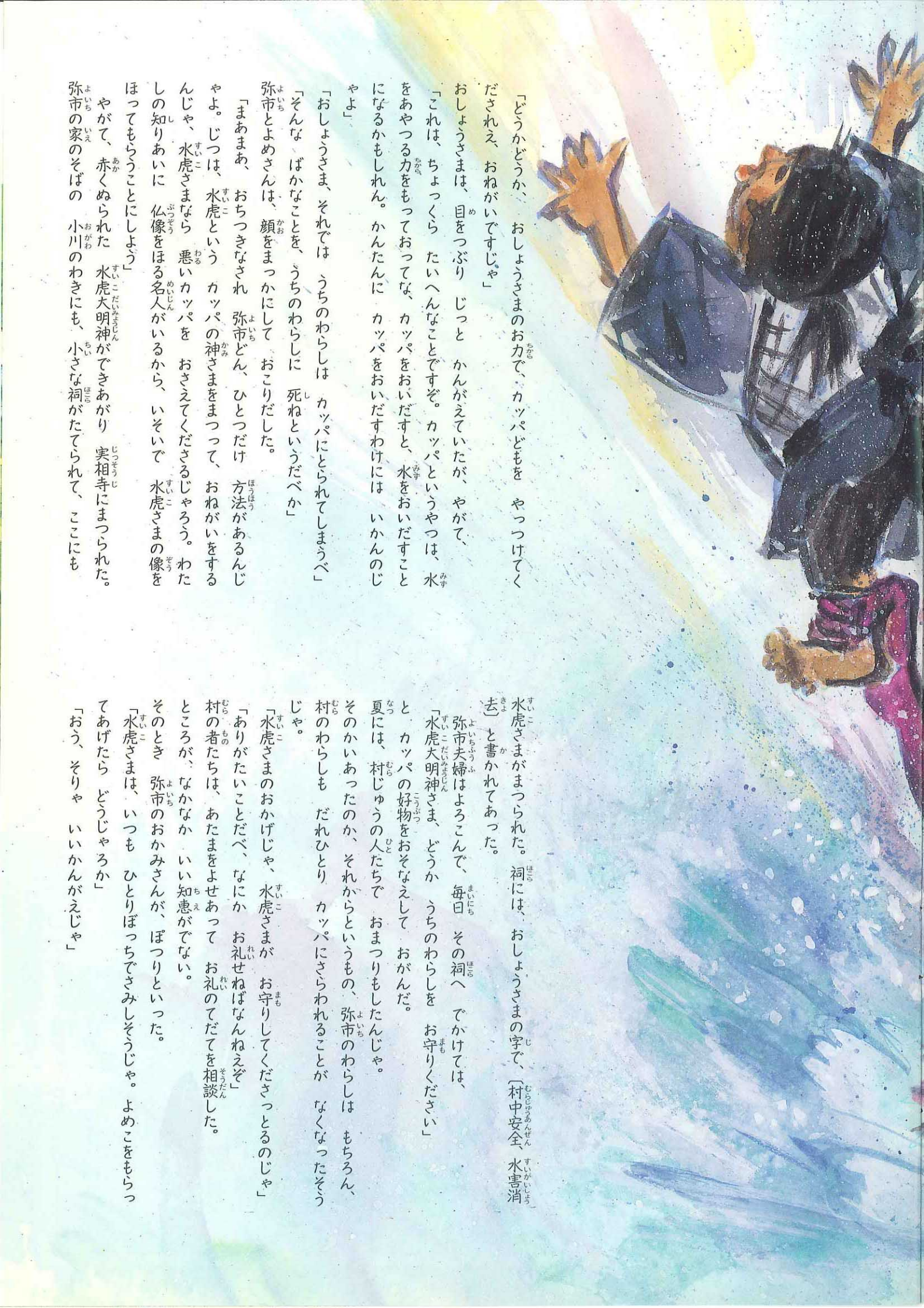
「なっ、なんですと。そりゃ たいへんなことだ、どうすりゃいいんじゃ」

「このへんのカッパときたら、どんなに少ない水のなかからでもあらわれていったんねらったわらしは、かならず さらっていくそうじゃ」

弥市の家のまわりは 水田にとりかこまれているし 小川も流れている。

これでは、カッパは どこからでも やってくることができる、とてもとても ふせぐことなどできない。

こまりはてた 弥市とおかみさんは、わらしをだきかかえて、近所の実相寺にかけこんだ。



「どうかどうか、おしょうさまのお力で、カッパどもを やっつけてくだされえ、おねがいですじゃ」

おしょうさまは、目をつぶり じっと かんがえていたが、やがて、

「これは、ちょっくら たいへんなことですぞ。カッパというやつは、水をあやつる力をもっておってな、カッパをおいだすと、水をおいだすことになるかもしれん。かんたんに カッパをおいだすわけには いかんのじゃよ」

「おしょうさま、それでは うちのわらしは カッパにとられてしまうべ」

「そんな ばかなことを、うちのわらしに 死ねというだべか」

弥市とよめさんは、顔をまっかにして おこりだした。

「まあまあ、おちつきなされ 弥市どん、ひとつだけ 方法があるんじゃよ。じつは、水虎という カッパの神さまをまつって、おねがいをするんじゃ、水虎さまなら 悪いカッパを おさえてくださるじゃろう。わたしの知りあいに 仏像をほる名人がいるから、いそいで 水虎さまの像をほってもらうことにしよう」

やがて、赤くぬられた 水虎大明神ができあがり 実相寺にまつられた。弥市の家のそばの 小川のわきにも、小さな祠がたてられて、ここにも水虎さまがまつられた。祠には、おしょうさまの字で、〔村中安全、水害消去〕と書かれてあった。

弥市夫婦はよろこんで、毎日 その祠へ でかけては、

「水虎大明神さま、どうか うちのわらしを お守りください」

と カッパの好物をおそなえして おがんだ。

夏には、村じゅうの人たちで おまつりもしたんじゃ。

そのかいあったのか、それからというもの、弥市のわらしは もちろん、村のわらしも だれひとり カッパにさらわれることが なくなったそうじゃ。

「水虎さまのおかげじゃ、水虎さまが お守りしてくださっとるのじゃ」

「ありがたいことだべ、なにか お礼せねばなんねえぞ」

村の者たちは、あたまをよせあって お礼のてだてを相談した。

ところが、なかなか いい知恵がでない。

そのとき 弥市のおかみさんが、ぽつりといった。

「水虎さまは、いつも ひとりぼっちでさみしそうじゃ。よめこをもらってあげたら どうじゃろか」

「おう、そりゃ いいかんがえじゃ」

みんなの意見がまとまって、こんどは　女の水虎さまがつくられたんじゃ。そうして、なかよくならんだ　夫婦の水虎さまが、まつられることになった。このことは、近くの村でも　ひょうばんになった。

「木造新田は　水虎さまのおかげで、わらしは元気にあそんでるし、おとなも安心して、しごとをしてるだよ。おらたちの村にも　水虎さまをまってはどうだべか」

「そうじゃ、おらたちの村にも　水虎さまをまつろう」

こうして、近くの村むらにも、水虎大明神の祠が　いくつもたてられて、いまでも、村じゅうを　守ってくれておるのじゃよ。

岩木川の水からうまれた水虎さま

このお話は、川による水難をおそれた村人が、水虎さまという　水難防止の神さまをまつって　安全を願ったお話です。

水神さまは　日本中　どこにでもありますが、水虎さまという　カッパの神さまをまつっているのは、青森県でも津軽地方だけで、この地方独特の信仰だそうです。

お話の西津軽郡木造町をたずねると、小川のほとりなどに　水虎大明神の小さな祀があったり、かわいいカッパの石像がたつ〔カッパ広場〕がありました。実相寺では、赤い水虎さまが　いまも大事にまつられています。

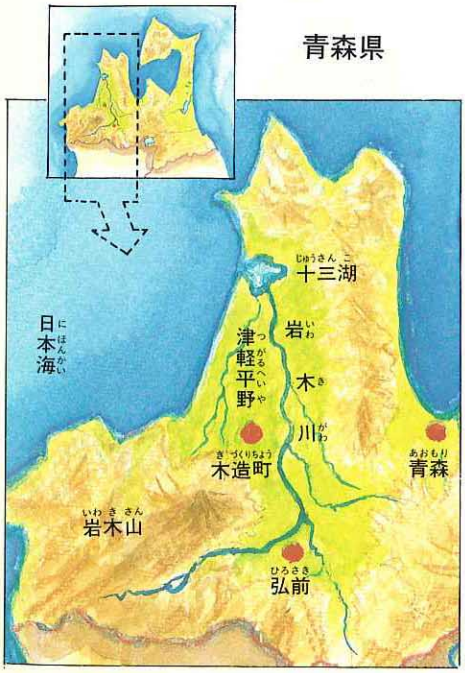
木造町あたりの稲作の歴史は古く、弥生時代の水田跡まであるほどです。だからといって、この地はけっして　ゆたかな土地ではありませんでした。大雨がふれば、岩木川はすぐに水害をおこしました。日本海から吹きつける偏西風は、砂あらしとなって　田畑をうめつくします。しかも、深い雪にとじこめられる長い冬。

北国のきびしい大自然とたたかいながら、人々は水田をひらくため、岩木川から水をひき、川をおそれながらも、大切に守り育ててきました。このような、人と川との深いつながりのなかから　水虎さまの信仰がうまれたのです。

現在の岩木川は、長さ106km。津軽の中心を北流し、十三湖にそそぐ、みちのくの清流です。この水が、何本もの用水路や排水路となって、津軽の水田地帯にのびています。

川辺に立ってみると、低くたれこめた雲の下、津軽の雪は、横なぐりに飛んでいました。

取材協力・木造町役場建設課、八木橋勝弘さん。実相寺ご住職。



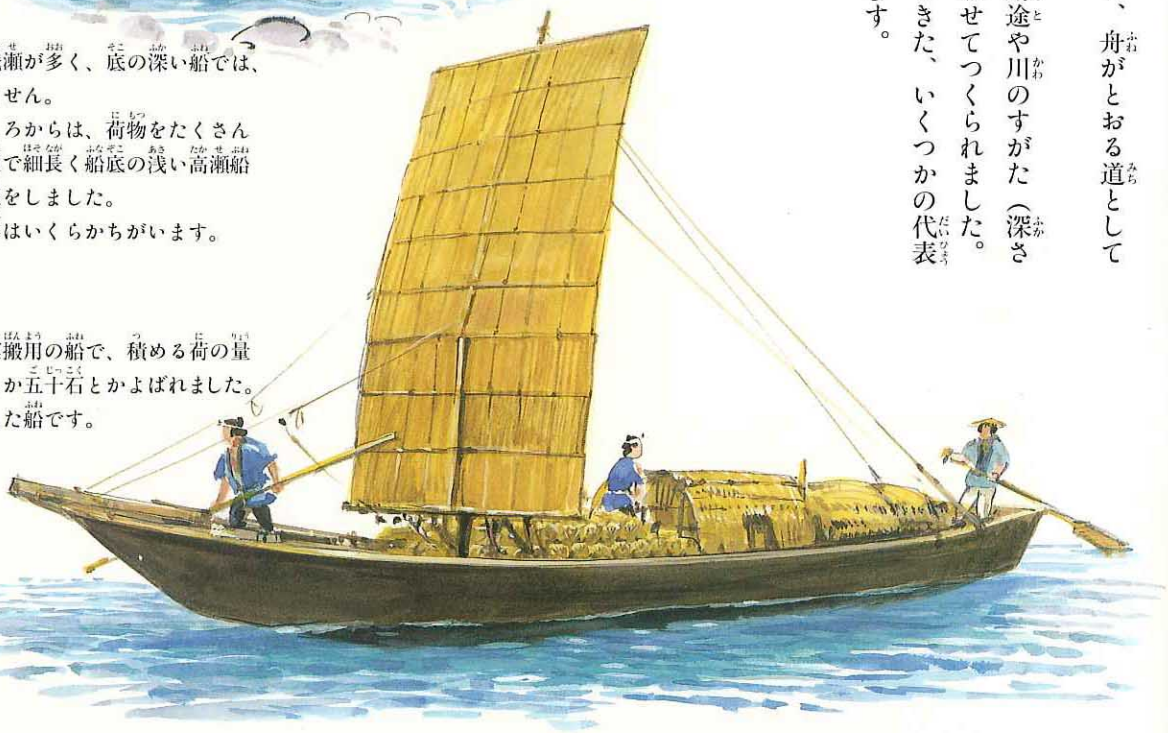
大昔から人々は川を、舟がとおる道として利用してきました。
いろいろな舟が、用途や川のすがた（深さや流れなど）にあわせてつくられました。
日本の川で活躍してきた、いくつかの代表的な舟をご紹介します。

高瀬船

日本の川は急流で浅瀬が多く、底の深い船では、荷物も多くは積めません。
そこで、江戸時代ころからは、荷物をたくさん積めるように、大型で細長く船底の浅い高瀬船がつくられ、大活躍をしました。
地域によっては、形はいくらかちがいます。

三十石船

江戸時代の大型の運搬用の船で、積める荷の量によって、二十石とか五十石とかよばれました。
絵は最上川で活躍した船です。



猪牙船

江戸でつくられた先のとがった船。
軽快で速く、おもに人を運ぶ通い船や漁業につかわれました。

川の伝統行事

三船祭（毎年、五月第三日曜日）

京都、嵯峨の車折神社のお祭です。
車折神社は、日本に一社しかない神社で、境内には、芸能神社もあり、学問や芸能の上達をねがう人たちの信仰をあつめています。
三船祭では、嵐山の大堰川に三十数そうの舟をうかべ、お舟遊びがおこなわれます。
三船とは、龍頭、鷁首（大鳥の頭）、供奉、の三船を意味しています。
龍頭船では管弦楽。鷁首船では舞が、供奉船では詩歌、書画、茶道など、一般芸能が奉納されます。
龍頭、鷁首は二隻一対で天子が乗る船といわれ、平安時代の貴族が用いたきらびやかな船です。
その間に、奉納した人の、健康や芸能上達を祈って、御座船、流扇船から扇子が流されます。
新緑したたる嵐峡にくりひろげられる、いかにも京都らしい、優雅なお祭です。

いろんな鳥にであえる 川辺でバードウォッチング

バードウォッチング
「なんだ、野鳥の観察か」
なんていわないで、とにかく
はじめてみよう。
望遠鏡をのぞいてみると、
いままで気がつかなかった
自然のいとなみが
見えてくるぞ。
スズメ一羽でも

このように
ポケットに入る
サイズがよい。

野鳥図鑑は、なるべく持ち運びが
しやすい小型のものがよい。

フィールドノート
観察記録は必ずつけよう。
鳥の名を知れば、ますます
おもしろくなる。

はきものは、
かるくて、足をしっかり保護して
くれるものなら、なんでもよい。

望遠鏡
中型の、7倍から10倍くらい
のものがあつかいやすい。

帽子は、
なるべくかぶろう。
あまり派手なものはさける。

色はなるべく目立たないもの

デイパックには、おべんとうや
おやつ、食べたあとのゴミを入れる
ビニール袋も忘れずに。

飲み水は
必ず持って行こう。

「こんなにかわいかったのか」と、見直すだろう。
鳥たちをとおして、草花や昆虫、川のせせらぎの美しさまでが新鮮に見えてくる。
それに、季節のうつりかわりのすばらしさなど、自然の大きな広がりを、心にきざむことができるのだ。
バードウォッチングは、だれでも簡単にたのしめるが、それなりの用意があると、なお　おもしろくなる。
それらの道具を、イラストで紹介しよう。
ひとつだけ、忘れてはならない大切なことがある。
それは、自然にたいする、やさしいおもいやりの心だ。

川にあつまる鳥は、水鳥、川辺の鳥、陸鳥に大きく分けられる。

川へ行くとき　これだけは守ってほしい

・一人ではぜったい行かない。・友達とでかけるときも大人の人といっしょに行く。・人のいないところでは遊ばない。・行先はかならずつげて行く。・人のいるところで石をなげない。・おやつやおべんとうのあとかたづけはきちんとし、ぜったいちらかさない。
・切れた釣り糸なども捨てないでもちかえる。

川のマメ知識

ワンド

ワンドは漢字で、〔湾処〕と書きます。つまり、湾のようなところという意味があり、広辞苑では入江と訳されています。
川にできるワンドとは、イラストのように川の流れにそってできた池のようなところです。
大阪の淀川下流部は、ワンドが多いところとして有名ですが、むかし、船の行き来がしやすいように、水深を保つため、流れのなかに石を積んだ水制というものを築いていました。
この水制に長い年月をかけて土砂がたまり、この水制にさえぎられて、池のような〔たまり〕が、いくつもできました。
これが淀川特有のワンドです。
ワンドは、魚や貝、植物、昆虫、水鳥たちにとって、とてもすみやすく、居心地のいい自然環境なのです。
現在、そうした環境を守り、さらに増やすために、人工のワンドをつくる研究や工事が、各地の川ですすめられています。

河川環境管理財団は
みんなに愛される川であるように、こんな仕事をしています。

＊よりよい水辺のプランニング
＊楽しく安全に遊べる川づくり
＊川をきれいに、川を愛する心を育む運動
＊未来の水辺を考えた調査や研究
＊せせらぎ・ふれあい基金

●この本は再生紙を使用しています。

監修　建設省河川局
財団法人 河川環境管理財団
Foundation of River & Watershed Environment Management
(〒104) 東京都中央区入船1丁目9番12号
TEL.(03)3297-2600(代表)